

(金のエンジェル賞 小学生中高学年の部)

## パンツストライキ

小六・中田 有俊

今日ぼくは新しいパンツを買った。お母さんは、

「これから毎日、自分で洗いなさい」

と言った。自分のだけだめんどろだし洗うのやだなく。ちよつと  
さわりたくねえなく。だから、

「やだよ」

と答えた。そしたらお母さんが、

「もうあなたのパンツ洗わないからね。好きになさい」

「なんで？」

とぼく。

「洗うからぬいでって言ったら脱衣婆だつえばあかって言うでしょ」  
なるほど口は災いのもとだが、ここで受け入れるわけにはいかな  
い。

「ちやあんと決まった所に脱いでおくから洗ってよ」

「自分で洗いなさい。お母さんいっぱい仕事あるから少しは楽にし  
てほしいの。だからストライキ」

母さんはそのままお風呂の方へ去って行った。

「こんにちは！ 新入りのパンツです。よろしくお願ひします」

「やあ、いらっしやい。おや君はトランクスだねえ」

「風通しが良いって言われました」

「新しい同志よ、カモン」

---

「あなたは？」

「同じトランクスさ。前に入ってきた」

「ところであなたは洗濯してもらってないのですか？」

「ええ、あなたがきたのをきっかけに、これからはご主人が洗ってくれるそうですよ」

「でも洗いたがってないのでしょ？」

「このまま放置されるのかなあ」

はてさて人間界は。

「ねえ新聞取ってるでしょ、ゴミ箱の袋換えてるでしょ、お買い物の時重いもの持ってるでしょ。お母さんがパンツ洗わないなら、ぼくやらないよ。新聞取らないし、ゴミ箱やお買い物も手貸さないよ」

「いいわよ」  
と言ってお母さんは行ってしまった。作戦二失敗！

「やおつかれさま」

とこれはパンツ界の住人。

「もう三日洗われてねえや」

古参のボクサーが言う。

「こんにちは、新入りのトランクスです」

「ぼくさーボクサーパンツだよ。まあそのうち日向ぼっこできるさ」  
ところがその後もお母さんは強情を張ってストライキを続けた。  
パンツたちは五日間洗われなかった。

「もうダメだ」

「希望を捨てちゃだめよ」

「満員だ。どうしたの？」

「あっ、またきた」

「かくかくしかじかこういう訳だよ」

---

---

「なんかぼくのせいみたいですすみません」

「もうダメだ」

「俺なんか月曜からだぞ」

「この家のお父さんはどうしてるんですか？」

「あの人はとっくに自分で洗ってるよ」

「ああ、私たちのご主人も自分で洗ってくれませんかね」

「早くお風呂に入りたい。さっぱりして、シャボンの香りまといたい」

「我々の仲間は何枚だ？」

「何枚だ？」

「何枚だ？」

「ナンマイダー、ナンマイダー」

はい、こちらは人間界。

「どっかに予備なかったかなあ」

ゴソゴソ押入を引っくり返す。

「あった…あと二枚か」

「ねえ母さん毎日靴下洗うからさ、パンツ洗ってよ」

「前もそんなこと言ってたけどためてるでしょ」

「今度は大丈夫だって」

「じゃパンツと一緒に洗ってちょうだい」

「それじゃぼくがパンツ洗うのと同じじゃないか」

「同じ手間でしょ」

「それに顔洗うタオルも別に洗ってね」

とタオルを投げられた。

「こんばん…うっ！ 空気が変！」

「かくかくしかじか、そろそろ六日目」

---

---

「ああ、はあ。そう」

鼻を押さえたまま六日目のパンツが言った。

「このままじゃ私たちきのこ生えちゃうわ」

「こうなりやどうにでもなれ」

「自分で洗うほかないのかしら」

四日目のパンツが、

「ぼくの時お腹こわしてたみたいでちよおとと……」

「ひええええええ!!」

ぼくはここで勝負を決めなければならぬ。そしてラストパンツを履く。フアアイツ!!

「明日の仕度できたの？」

「ねえぼくたち自分で洗濯機に入ろうよ。ぼくが洗剤入れるよ」

「ぼくがスイッチ入れるよ」

「だれがふたしめるの？」

「ぼくは一番最初に洗ってほしい。なにしろついてるんだから」

「お前と一緒にだけはやだ」

「そんなこと言って俺だけおいてけぼりにするつもりだな！」

ぼくは最終手段に出た。木綿の手ぬぐいを禪にした。どうだ！  
母  
さんに仁王立ちして見せた。

「明日水泳でしょ」

ガビーン。水泳、水泳……ぼくはそのままゴム手袋をしてバケツ  
を手に取った。負けた。

---



画：田中六大

---